

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2021.12)令和3年度:

,

看護系大学生の献血行動に影響する要因 — 献血回数の違いに着目して —

小林巧宜 中野翔

(指導：山口希美)

I. 緒言

近年、我が国では若年層の献血者数が少ないという現状がある¹⁾。先行研究では、若年層の献血に対するマイナスイメージを除くこと、物理的に献血しやすい環境を整えていくことが、献血者数増加に繋がると報告されており²⁾³⁾⁴⁾、このような取り組みはすでに行われているが⁵⁾⁶⁾、若年層の献血者数の著しい増加は見られていない。

そこで本研究では、献血に対するマイナスイメージが少なく、物理的に献血しやすい環境が整っていると考えられる看護系大学生に焦点をあて、献血回数によって、献血行動に影響する要因に、どのような違いがあるのかを明らかにし、若年層の献血者数向上のために必要な、さらなる取り組みの示唆を得たので、ここに報告する。

II. 方法

対象:看護系大学であるA大学の学生(1~4年生)243名

データ収集方法:A大学で、2021年8月6日~9月7日に無記名Web調査を実施した。調査はGoogleフォームを用いて行い、URLは学内メールを使用して対象者に向けて送信した。

調査内容:対象者の基本属性(年齢・性別)、献血回数、初回献血年齢、献血場所、献血回数ごとの痛みの程度、初回献血・複数回献血を敬遠する理由、複数回献血しようと思った理由、献血に関する改善点を調査した。

献血場所は選択式、献血回数ごとの痛みの程度についてはVerbal Rating Scale⁷⁾を用いた選択式で行い、献血回数ごとの理由、改善点は自由記述として調査を行った。

データ分析方法:対象者の基本属性(年齢・性別)、献血回数、初回献血年齢、献血場所、献血回数ごとの痛みの程度は各項目で単純集計し

た。

初回献血・複数回献血を敬遠する理由、複数回献血しようと思った理由、献血に関する改善点はBerelson, B.の内容分析の手法⁸⁾を参考とし、データを質的記述的に分析した。研究のための問いは献血回数0、1回では「看護系大学生が献血しない要因は何か」、献血回数2回以上では「看護系大学生が複数回献血する要因は何か」とし、問いに対する回答は「看護系大学生が献血しない要因は〇〇である」、「看護系大学生が複数回献血する要因は〇〇である」とした。

なお、分析の妥当性、信頼性を高めるため、本研究に携わっていない看護研究者2名に、一致率算出のための協力を依頼した。

倫理的配慮:対象者に、研究の目的、方法、期待される結果、研究協力に関する利益・不利益、研究への参加は自由意志であること、得られた回答は本研究以外の目的では使用しないこと、統計的に処理され個人が特定されないこと、研究結果を公表することを文書にて説明した。調査票の回答送信をもって研究協力の同意を得るものとした。

III. 結果

調査票のURLを243名に送信し、127名から回答を得た(回収率52.3%)。献血回数0回は90名(70.9%)、1回は16名(12.6%)、2回以上は21名(16.6%)であった。0回は114記録単位、27同一記録単位群に、1回は19記録単位、8同一記録単位群に、2回以上は29記録単位、11同一記録単位群に分割でき、すべての記録単位を分析対象とした。

献血回数ごとに記録単位を分類した結果、0回では5カテゴリ、1回では3カテゴリ、2回以上では4カテゴリが形成された(表1)。カテゴリ分類における一致率は100%と96.4%で、信頼性が確

表1.看護系大学生の献血行動に影響する要因

献血回数	カテゴリー	記録単位数(%)
0回 (n=114)	【検査データ・輸血歴・服薬歴が献血基準に満たないことや体調不良・血管の細さから献血を行えなかったこと】	45 (39.5)
	【機会・きっかけや時間がなくタイミングが合わないこと】	36 (31.6)
	【痛み・恐怖心や不安からくる抵抗感と健康に対する自信のなさ】	18 (15.8)
	【周囲で献血する人が少なく面倒である理由がないため場所も知らないという無関心さ】	11 (9.6)
	【社会情勢の影響や献血会場の地理的問題のため】	4 (3.5)
1回 (n=19)	【機会や時間がなくタイミングが合わないことから特別な用事として立ち寄れないこと】	12 (63.2)
	【献血間隔や検査データが献血基準に満たないといった身体的な理由】	6 (31.6)
	【身体反応への不安】	1 (5.2)
2回以上 (n=29)	【人の役に立てる上に自分の体調も知ることができるから】	10 (34.5)
	【勉強や会話ができる空間であり景色が貰えて楽しいこと】	9 (31.0)
	【人から勧誘され健康への自信や時間的余裕があるから】	7 (24.1)
	【想像より痛くなく注射や献血が好きだから】	3 (10.4)

保されていると判断した。以下、献血回数0回のカテゴリは【 】, 1回は [], 2回以上は《 》で示す。

IV. 考察

【機会・きっかけや時間がなくタイミングが合わないこと】[機会や時間がなくタイミングが合わないことから特別な用事として立ち寄れないこと] から、時間がかかることやタイミングが合わないことによって献血を敬遠し、複数回献血につながらないことがわかった。全血献血は所要時間10~15分程度、成分献血は40~90分であり⁹⁾、時間に関係なく立ち寄れる場所ではなく、時間やタイミングが影響する行動であると考えられる。献血場所と献血時間を指定できるWeb予約システムや電話での予約も可能であるが、Web予約は複数回献血クラブ「ラブラッド」という、1回以上献血した人のみが利用できるシステムとなっている¹⁰⁾。そのため、初回献血時に、このシステムの周知を積極的に行い、時間やタイミングによる影響を少なくすることが必要であり、さらに献血経験がない人も時間に縛られることなく献血できるように、新たなシステムの開発などの工夫が必要であると考えられる。

【痛み・恐怖心や不安からくる抵抗感と健康に対する自信のなさ】[身体反応への不安] から、心理的な影響により献血をしないということがわかった。しかし、このような心理的な影響は、献血回数1回よりも0回の方が多くみられている。そのため、一度献血すると痛みや恐怖心、不安からくる抵抗感は薄れ、心理的な影響により献血をしない人は減少するのではないかと考える。また、神経損傷などの採血副作用を低減させ、献血者の精神的負担を少なくすることを目的に、献血の事前検査を指先穿刺に変更としている地域がある¹¹⁾。このような方法が周知され、全国的に実施されることや、さらなる痛みの軽減技術の向上が恐怖心や不安といった心理的な要因の緩和に有効であると考えられる。さらに、献血回数2回以上では《勉強や会話ができる空間であり景品が貰えて楽しいこと》《人の役に立てる上に自分の体調も知ることができるから》《想像より痛くなく注射や献血が好きだから》という実証的なカテゴリが形成されたことから、このようなポジティブな心理が勝るような広報活動や環境の整備を行い、未献血者には一度足を運んでもらえるようする必要があるのでないかと考える。

【周囲で献血する人が少なく面倒である理由がないため場所も知らないという無関心さ】は、0回のみにもみられる特徴的なカテゴリである。看護系大学生は、献血の重要性を理解していると考えていたが、献血に無関心という要因があることがわかった。すでに厚生労働省では、献血対象年齢前の小学生等に血液(献血)について正しい知識の

普及を図るため啓発資材を製作・配布することにより、幼少期からの献血への理解を深めることを目的とした取り組みを行っている¹²⁾。そのような中で献血に無関心の人もいることから、若年層の幅広い年代の人が献血に関心を持てるような学校でのポスター作製などの授業を組み込み、献血について考えることができる取り組みをさらに増やしていくべきである。

《人から勧誘され健康への自信や時間的余裕があるから》から、最も気軽に献血できるのは、友人や知人などに誘われることであると考えられる。真壁らは、若年層の献血啓発には友人同士での誘いが有効であると述べている⁴⁾。献血経験者が未献血者を誘いやすい紹介制度といった魅力づくりが必要である。

【検査データ・輸血歴・服薬歴が献血基準に満たないことや体調不良・血管の細さから献血を行えなかったこと】[献血間隔や検査データが献血基準に満たないといった身体的な理由] から、献血したくてもできなかった人がいることがわかった。しかし、この2つのカテゴリ内には、検査を受けて献血不可能と判断された人と、検査を受ける前から献血できないと自分で判断している人がいると考えられる。過去に検査データが基準に満たなかったために、現在も献血ができないと考えている人がいる可能性があり、改めて献血会場に足を運ぶよう事前検査の痛みが以前よりも軽減されていることや、貧血であれば事前検査で把握できるなどの献血会場に行く利益を公表することが有効であると考えられる。

V. 引用文献

- 1) 厚生労働省. (n. d.). 年代別献血者数と献血量の推移. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000063233.html>
- 2) 竹下明裕, 古牧宏啓, 浅井隆善他: 高校生の献血意識に関する調査. 日本輸血細胞治療学会誌, 62(6): 711-717, 2016.
- 3) 田久浩志: 若年献血者数増加の為の非献血者の意識構造に関する研究; 現在の若年者の意識より見えてくること. 血液事業, 29(4): 615-617, 2007.
- 4) 真壁美香, 大川聡子, 安本理抄, 根本佐由美, 上野昌江: 大学生の献血意識を踏まえた啓発方法の検討—献血経験の有無に着目して—. 日本地域看護学会誌, 22(1): 43-50, 2019.
- 5) 厚生労働省. (n. d.). 厚生労働省献血者確保対策について(厚生労働省の取り組み). <https://www.mhlw.go.jp/stf2/shingi2/2r9852000000styz-att/2r9852000000su67.pdf>
- 6) 日本赤十字社. (n. d.). 献血する. <http://www.jrc.or.jp/donation/>
- 7) 特定非営利活動法人日本緩和医療学会. (n. d.). がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン(2010年版). https://www.jspm.n.e.jp/guidelines/pain/2010/chapter02/02_02_02.php
- 8) 舟島なをみ: 質的研究への挑戦. 第2版. 医学書院. 2007.
- 9) 日本赤十字社. (n. d.). 献血いただく前に 献血の流れ. <https://www.jrc.or.jp/donation/about/before/>
- 10) 厚生労働省. (2018). <https://www.mhlw.go.jp/content/11121000/000366463.pdf>
- 11) 広島県赤十字血液センター. (2020. 4. 27.). 献血バスでの事前検査の採血方法変更で献血者の負担を軽減. <https://www.bs.jrc.or.jp/csk/hiroshima/2020/04/post-202.html>
- 12) 厚生労働省. (n. d.). 献血者確保対策について(厚生労働省の取り組み). <https://www.mhlw.go.jp/stf2/shingi2/2r9852000000styz-att/2r9852000000su67.pdf>